A-II-6

認知音楽療法による運動機能の改善

[1]木沢記念病院　中部療護センター, [2]木沢記念病院　リハビリテーションセンター
○加藤玲子[1], 奥村由香[1], 奥村　歩[1], 豊島義哉[1], 浅野愛子[1], 小森三代[2],
伊嶌泰子[2], 影山裕子[1], 篠田　淳[1]

【目的】当センターでは、Vegetative state の改善において、木沢式認知音楽療法評価表（TBI-MTS）の随意的運動反応項目に改善があったことを本学会で報告した（2007）。今回、感覚と情動や記憶などを統合的に刺激する認知音楽療法が、どのような運動機能の改善に関与しているか、運動反応に改善を認めた症例の臨床経過をもとに考察した。【対象と方法】症例は交通事故による頭部外傷後遺症で四肢麻痺（Brs 右:上下肢Ⅴ、左:上下肢Ⅲ）を呈する 38 歳男性。受傷時 JCSⅢ、受傷より 8 か月後に当センターに転院、認知音楽療法を開始した。右上肢には把握反射を認め、追視はあるものの手元を見なかった。従命反応は不可、発声、表情の変化はみられなかった（TBI-MTS 17/36 点）。認知音楽療法では、鏡による視覚フィードバック、聴いて見て触れて音を出す楽器活動、好みの音楽聴取を行った。【結果】鏡を見て指示した顔の部位が触れるようになった後、促せば、笛吹き、無声音での発語、歌唱行為がみられるようになり、微笑様の表情変化もみられた。また、楽器操作においては、手元を視線上に持っていけば上下左右の提示方向を見てリーチするようになり、把持した MD をデッキに挿入する、ギターの弦を爪弾くなど動作がみられるようになった（TBI-MTS 25/36 点）。日常生活には、挨拶の応答やグーパーなどの指示動作として徐々に汎化された。【考察】認知音楽療法では、運動の発動性と協調性に向上がみられ、音楽活動の状況に合わせた運動が出現した。このことから、感覚と情動や記憶などを統合的に刺激する認知音楽療法は、運動発現・調節を行うための情報入力と、運動出力の情報形成の橋渡しをする高次運動野の機能改善に関与しているものと考えられる。